

アクティブ・ラーニング型授業についての学生の認識 Students' Perception and Attitude on Active Learning Courses

高橋 文音
Ayane TAKAHASHI

久保 結季
Yuuki KUBO

寺尾 敦
Atsushi TERAO

青山学院大学
Aoyama Gakuin University

あらまし：アクティブ・ラーニング（AL）型の授業を受講していた大学生 29 名を対象に、AL 型の授業への参加態度、授業で獲得したと考えるスキル、AL 型授業と知識伝達型講義についての認識、AL 型授業あるいは知識伝達型講義を通してこれから獲得したいスキル、を調査した。学生は AL 型の授業に能動的・積極的に参加していた。新しい知識、ディスカッションのスキル、物事を深く考える力など、5つの知識とスキルを、学生は初期に期待していたのと同程度には獲得できたと認識していた。知識伝達型講義と比べて、AL 型の授業は退屈せず、授業に積極的に参加できると考える一方、知識伝達型講義の方がよい成績をとることができる傾向が見られた。AL は知識獲得を促進する授業形態としては認識されていなかった。こうした調査結果に基づき、基礎的な知識や技能の獲得が目標の授業に AL を導入することを提案した。

キーワード：アクティブ・ラーニング 知識伝達型講義 スキル獲得 態度

1 はじめに

2020 年度からの次期学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことが要請された。こうした学習はアクティブ・ラーニング（AL）と呼ばれてきたものである。

AL の導入は大学教育においても要請されている。中央教育審議会の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（平成 24 年 8 月 28 日）では、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（AL）への転換を求められている。

大学では、AL そのものについて学習する機会もある。たとえば、学習環境デザインを学ぶと、AL の効果が促進される方法などを知ることができる。

しかし、AL 型の授業を受講している多くの学生は、なぜ AL が有効なのかについて知っているわけではない。この意味において、多くの学生は、AL 型の授業を「受動的に」受けていると言える。

AL についての十分な知識を有していない学生が AL 型の授業を受講するとき、その効果を認識しているのだろうか。また、授業自体をどう捉えているのだろうか。こうした疑問から調査研究を行った。具体的には、AL 型の授業への参加態度、授業で獲得し

たとえるスキル、AL 型授業と知識伝達型講義についての認識、AL 型授業あるいは知識伝達型講義を通してこれから獲得したいスキル、を調査した。

2 方法

2.1 調査協力者

青山学院大学社会情報学部での「マルチメディア学習論」の受講者に調査への参加を依頼した。この授業は、15 回ある授業のうち、第 4 回から第 15 回までの授業で、マルチメディア学習に関連した 4 つのテーマを扱っていた。ひとつのテーマあたり 3 回の授業が費やされた。それぞれのテーマにおいて、最初の 2 回は教員による講義が行われた。多角的な視点からテーマを扱うため、専門分野の異なる教員が 1 回ずつ講義を担当した。それぞれのテーマの最終回には少人数でのディスカッションが行われた。調査は、最初のテーマから 3 番目のテーマでの、ディスカッションを行う授業の冒頭に実施した。第 1 回の調査協力者は 28 名、第 2 回は 22 名、第 3 回は 23 名であった。

2.2 調査項目

第 1 回から第 3 回調査での用いた多くの調査項目

のうち、本論文に関係のある項目を表1に示す。「本授業」とは「マルチメディア学習論」を意味する。

表1 主な調査項目

調査	調査項目
第1回	ALについての知識、本授業での学習態度、本授業でのスキル獲得の期待
第2回	本授業での学習態度、本授業で獲得したスキル、ALおよび知識伝達型講義で獲得したスキル、ALおよび知識伝達型講義についての認識
第3回	本授業での学習態度、本授業で獲得したスキル、自分および社会が求めているスキル

3 結果と考察

3.1 ALについての学生の知識

第1回調査において、アクティブ・ラーニングという言葉を知っているかをたずねた。選択肢は4つで、「聞いたことがない」が2名、「聞いたことはあるが、意味はほとんど(あるいはまったく)知らない」が15名、「意味を、いくらかは知っている」が8名、「意味を、人に説明できる程度に知っている」が2名であった(1名は無回答)。

第1回調査では、ALとは何かについて説明は行わなかった。そのかわりに、「講義型授業」と「参加型授業」という区別を調査の初めに提示した。講義型授業とは、主に大教室などで行われ、教師からの知識伝達が講義の大半を占める授業であるとした。参加型授業とは、主に一般教室で行われ、学生が主体となり、ディスカッションやグループワークなどが講義の大半を占める授業であるとした。

調査協力者はこれまでにいくつかの参加型授業を履修していた。上述の定義の下で、これまでに履修した参加型授業をすべて列挙するように求めたところ、授業名称をひとつも挙げなかったのは2名のみであった。ほとんど(19名)の学生は複数の授業名称を挙げた。ただし、ここで挙げられた授業の中には、数学の演習科目のような、ALであるとはおそらく見なされない授業も含まれていた。

調査に協力した学生の多くは、アクティブ・ラー

ニングとは何かということについての知識はあまりないが、いくつかの参加型講義(ALを含む)の受講経験のある学生だと言える。

3.2 授業での学習態度

第1回から第3回の調査で、「マルチメディア学習論」の授業での学習態度を、「A: 明らかに受動的・消極的」から「E: 明らかに能動的・積極的」までの5段階でたずねた。回答の度数分布を表2に示す。

「A: 明らかに受動的・消極的」を1点、「E: 明らかに能動的・積極的」を5点として、各調査回の平均点を計算した。平均点は徐々に上昇していたが、この変化は統計的に有意ではなかった。

学生は初回調査の時点から能動性が比較的高かった。初回調査での最頻値は「B: どちらかといえば能動的・積極的」の16名で、これは調査参加者の57%を占める。その後の調査での学習態度に向上は見られないが、全体として講義に能動的に参加していると言える。

表2 授業での学習態度の度数分布

調査	回答					平均
	A	B	C	D	E	
1回(N=28)	1	6	4	16	1	3.3
2回(N=22)	0	5	3	10	4	3.6
3回(N=23)	0	3	5	10	5	3.7

A: 明らかに受動的・消極的 … 1点

E: 明らかに能動的・積極的 … 5点

3.3 スキル獲得の期待と認識

第1回の調査で、「マルチメディア学習論」の授業を通して、どのような知識やスキルが、どの程度向上すると期待するかを、5件法(「まったく向上しない」から「5点:非常に向上する」)でたずねた。第2回と第3回の調査では、これらのスキルがどの程度向上したと思うかを5件法(「まったく向上しなかった」から「非常に向上した」)でたずねた。対象とした知識およびスキルは、マルチメディア学習についての新しい知識、ディスカッションのスキル、レポート作成のスキル、物事を多角的に考える力、物事を深く考える力、の5つであった。「まったく向上しない(しなかった)」を1点、1点刻みで「非常に

向上する(した)」を5点とした。

3回の調査での5つの知識およびスキルに対する評価の平均値を表3に示す。これら平均値は比較的高い値であった。知識およびスキル獲得の期待(第1回調査)と認識(第2、3回調査)は全体として高い水準にあると言える。

5つの知識およびスキルについて、第1回と第2回、および、第2回と第3回でのスコアを比較した。有意水準を5%として、対応のある2標本での母集団平均の差の検定を行ったところ、第1回から第2回にかけて、「物事を多角的に考える力」についてのみ、有意にスコアが低下していた($t(21) = 2.98, p = .007$)。その他には有意なスコアの変化は認められなかった。

表4に、第1回と第2回、および、第2回と第3回での、評定スコアの相関係数を示す。全体として、高い相関が得られた。

以上の結果から、5つの知識およびスキルの獲得について、学生は比較的高い期待を持って「マルチメディア学習論」を受講しており、授業を通してその期待と同程度にはこれら知識およびスキルを獲得できたと実感していたと言える。

表3 得られる(れた)スキルの評価スコア平均

知識およびスキル	調査		
	第1回	第2回	第3回
新しい知識	4.3	4.3	4.2
ディスカッション	3.5	3.6	3.7
レポート作成	3.1	3.4	3.7
多角的思考力	4.3	3.8	3.8
深く考える力	4.1	3.9	3.9

表4 スキルの評価スコアの調査間相関

知識およびスキル	調査	
	第1、2回	第2、3回
新しい知識	.686	.515
ディスカッション	.631	.738
レポート作成	.547	.489
多角的思考力	.403	.569
深く考える力	.517	.218

3.4 ALと知識伝達型講義の比較

第2回調査の冒頭で、「知識伝達型講義」と「アクティブ・ラーニング」の違いを説明した。知識伝達型講義は一方的な知識伝達スタイルで行われる。課題には正解が存在する。学習者は、教え手の設定した学習目標をどれくらい達成できたかによって評価される。ALでは、意見交換や実践行為など、学習者中心のスタイルで行われる。課題には正解が存在しない。学習者は、どのくらい活発に参加したかによって評価される。

3.3節で述べた結果は「マルチメディア学習論」で獲得できる知識とスキルについての、学生の期待と認識であった。3.1節で述べたように、多くの学生はこの授業以前にもいくつかのAL型授業を受講していた。そこで、これまでに受講した「マルチメディア学習論」を除くAL型授業で、3.3節と同じ5つの知識とスキルがどの程度向上したと考えているかを第2回調査でたずねた(5件法)。比較のため、これまでに受講した知識伝達型講義で、これら知識とスキルがどの程度向上したと考えているかをたずねた。

ALおよび知識伝達型講義で、5つの知識およびスキルがどの程度向上したかを自己評価したスコアの平均値を表5に示す。「まったく向上しなかった」を1点、1点刻みで「非常に向上した」を5点とした。

表5 これまでに獲得したスキルの評価スコア平均

知識およびスキル	授業のタイプ	
	AL	知識伝達型
新しい知識	3.5	4.0*
ディスカッション	4.1**	1.8
レポート作成	3.0	3.5
多角的思考力	4.0*	3.4
深く考える力	3.9†	3.3

注: ALはマルチメディア学習論を除く

†: $p < .10$ *: $p < .05$ **: $p < .01$

ALと知識伝達型講義を比較すると、「ディスカッションのスキル」と「物事を多角的に考える力」においてALの評価値が5%水準で有意に高くなった(それぞれ、 $t(21) = 11.40, p < .001$; $t(21) = 2.64, p = .015$)。

有意ではないが、「物事を深く考える力」においてALの評価値が高い傾向にあった ($t(21)=2.05, p=.053$)。一方、「新しい知識」では、知識伝達型講義の評価値が有意に高くなった ($t(21)=2.52, p=.020$)。

第2回調査では、ALと知識伝達型講義それぞれについて、獲得した知識とは別の観点からの質問も行った。すなわち、「よい成績をとることができる」「自分の長所を授業で生かすことができる」「積極的に学習を行っている」といった認識あるいは態度を、「まったくそう思わない(1点)」から「非常にそう思う(5点)」までの5件法でたずねた。ALおよび知識伝達型講義についての認識あるいは態度の評価スコアの平均値を表6に示す。

知識伝達型講義と比較してALは、積極的に学習でき ($t(21)=3.04, p=.006$)、退屈せず ($t(21)=5.78, p<.001$)、授業中に自分が何をすればよいか明確である ($t(21)=2.52, p=.020$) と認識されていた。一方で、統計的に有意ではないが、知識伝達型講義はよい成績が取れると認識されていた ($t(21)=1.74, p=.095$)。

表6 授業についての認識の評価スコア平均

認識あるいは態度	授業のタイプ	
	AL	知識伝達型
よい成績が取れる	3.0	3.4 †
長所を活かせる	3.5 †	2.8
積極的に学習	3.7**	3.0
好き	3.3	3.2
退屈しない	3.8**	2.2
することが明確	3.5*	2.9
学習方法を理解	3.1	3.5

注：†: $p < .10$ *: $p < .05$ **: $p < .01$

学生は、ALと知識伝達型講義で、異なった利点があると認識していると言える。大まかには、いわゆる学力の3要素のうち、「基礎的な知識・技能」は知識伝達型講義と相性がよく、「思考力・判断力・表現力」と「主体性・多様性・協調性」はALと相性がよいと認識されていると考えられる。

しかし、ALは本来、知識獲得を促進する方法でもある。ALを、知識獲得を促進する学習として学生に

認識してもらうことが、今後の課題と言える。

3.5 求める/求められるスキルと授業形態

第3回調査の最後に、自身が得たいスキルと、社会人として必要とされているスキルについて具体的に記述することを求めた。続いて、そのスキルはALあるいは知識伝達型講義のどちらで獲得できると考えるかをたずねた。

ALを通して獲得できると考えられていたスキルでは、自分が求めるスキルでも社会が求めるスキルでも、コミュニケーション能力、プレゼン力、発信力の3つが上位に挙げられた。一方、知識伝達型講義を通して獲得できるスキルとしては、英語力、情報スキル、資格試験や公務員試験に役立つ知識など、基礎的な知識・技能が挙げられた。具体的に求める知識・技能は学生によって異なっていた。この結果は、3.4節で述べた、ALおよび知識伝達型講義についての学生の認識と一致している。

これまでは知識伝達型で行われてきた、基礎的な知識や技能の獲得が目標の授業に、ALを導入することを考えたい。前節で述べたように、ALは本来、知識獲得を促進する方法でもある。知識伝達型講義に求めるものは個人差があるが、ALに求めているものは汎用的で、学生間で共通している。基礎的な知識や技能の獲得が目標の授業にALを導入しても、反発は生じないであろう。ALによって知識獲得を促進すると同時に、コミュニケーション能力、プレゼン力、発信力を育成することが期待できる。

参考文献

- [1] 西川純、『アクティブ・ラーニングによるキャリア教育入門』, 東洋館出版社, 2016
- [2] 杉江修治、『共同学習がつくるアクティブ・ラーニング』, 明治図書出版, 2016
- [3] 成田秀夫、『アクティブ・ラーニングをどう始めるか』, 東信堂, 2016
- [4] 秋田喜代美、『教師の言葉とコミュニケーション』, 教育開発研究所, 2010
- [5] 美馬のゆり、『未来の学びをデザインする』, 東京大学出版会, 2005
- [6] 高垣マユミ、『授業デザインの最前線』, 北大路書房, 2005